

墓穴横宗屋

大分県大分市所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

第 74 輯

9 8 6

大分県教育委員会

屋 宗 横 穴 墓

大分県大分市所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

序 文

大分市の東部に位置する大在から坂ノ市にかけての一带は、豊後風土記や和名抄によるところ、豊後国海部郡佐慰郷にあたり、古代には、大和朝廷のもとで活躍した「豊後海部」の本拠として栄えたところであります。

この地域では現在、新産業都市計画にもとづく土地地区画整理工事が進められておりますが、このため同市大字角子原字屋宗での造成工事中に4基の横穴墓が発見されました。県教育委員会では、その取り扱いについて、関係機関と慎重な協議を重ねてまいりましたが、この段階での事業計画の変更は困難であると判断し、記録保存のための発掘調査を行うこととしました。この横穴墓群は小規模なものではありますが、当時の家族墓の変遷を知る上で注目すべき貴重な知見を得ることができました。

この成果が、今後の文化財保護や学術研究に貢献するところが少なくないと確信いたします。

最後になりましたが、この調査にご協力いただいた新産業都市開発局大在土地地区画整理部・大分市教育委員会はじめ関係各位に対し、心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和61年3月31日

大分県教育委員会

教育長 藤 井 義 美

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和60年度に実施した大分県大分市所在の屋宗横穴墓の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は新産業都市開発局大在土地区画整理事業に伴って実施した。
3. 調査団の構成は次のとおりである。

総括 大分県教育委員会

教 育 長	藤 井 義 美
文化課長	高 塩 至
主幹兼課長補佐	塔 鼻 勝 人

調査

文化課専門員兼係長	後 藤 宗 俊
文化課主査	澁 谷 忠 章
文化課主任	玉 永 光 洋
文化課嘱託(現福岡市教委)	吉 武 学

事務

文化課主幹兼庶務係長	橋 本 淳 一
文化課主査	伊 藤 正 行

4. 本書の執筆は村上久和(文化課主任)、玉永光洋が分担した。
5. 遺構・遺物の実測・製図・撮影は、主として玉永が行い、村上、永松みゆき、姫野和子(文化課嘱託)、吉田宏(山口大学学生)の協力を得た。
6. 発掘調査については、大分市教育委員会の讃岐和夫・塔鼻光司の両氏にご協力いただいた。
7. 本書の編集は玉永が行った。

目 次

I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 遺構と遺物	5
IV まとめ	17

挿図目次

第1図 屋宗横穴墓群周辺主要古墳分布図	3
第2図 横穴墓配置図	4
第3図 横穴墓垂直分布図	4
第4図 1号横穴墓前庭部出土遺物	6
第5図 1号横穴墓玄室内出土遺物(1)	6
第6図 1号横穴墓実測図	7
第7図 1号横穴墓玄室内出土遺物(2)	8
第8図 2号横穴墓実測図	9
第9図 2号横穴墓玄室内出土遺物	10
第10図 3号横穴墓実測図	11
第11図 3号横穴墓玄室内出土遺物	12
第12図 4号横穴墓前庭部出土遺物	12
第13図 4号横穴墓実測図	13
第14図 4号横穴墓玄室内出土遺物(1)	14
第15図 4号横穴墓玄室内出土遺物(2)	15

図版目次

図版 1	1号横穴墓玄室内	1号横穴墓羨門前庭部(1)
	1号横穴墓前庭部土層	1号横穴墓羨門前庭部(2)
	1号横穴墓前庭部(北より)	1号横穴墓前庭部(南より)
	前庭部遺物出土状況(1)	1号横穴墓前庭部遺物出土状況(2)
図版 2	2号横穴墓全景	2号横穴墓玄室内
	4号横穴墓前庭部・テラス	3号横穴墓玄室内
	4号横穴墓羨門前庭部	4号横穴墓前庭部遺物出土状況
	4号横穴墓玄室内	
図版 3	横穴墓前庭部出土遺物	
図版 4	横穴墓玄室内出土遺物	

表 目次

第1表	1号横穴墓出土玉類計測表.....	8
第2表	4号横穴墓出土玉類計測表.....	14
第3表	横穴墓一覧表.....	18

I 調査の経過

大分県新産業都市開発局大在土地区画整理部が進めている大分市大字角子^{ツノ}原地区の造成工事進行中に、地区の郷土史家から大分市教育委員会への通報があった。ただちに、市の担当者は現地を視察した。その結果、戦時中に防空壕として利用され、現在ゴミ穴となっている2基の横穴墓が確認された。そして、崖面にはその他にも横穴墓が広がり分布する可能性が指摘できた。そこで、市教育委員会は開発主体者が大分県であることから、大分県教育委員会へ連絡することとなった。そのため、県教育委員会ではつぶさに工事の中止を依頼し、関係機関と横穴墓の発見された部分の取り扱いについて協議がなされた。しかしながら、この段階での事業計画の変更は困難であるとの結論に達し、完全な記録保存を行なうため緊急発掘調査を実施することとなった。

調査は、すでに防空壕として使用された2基の横穴墓に埋まっている土の除去と清掃から取りかかり、しだいに周辺部の表土除去、遺構確認作業へと進めていった。また、丘陵上部の試掘も合せて実施した。

その結果、横穴墓は新たに2基が発見され、合計4基が確認された。遺物は須恵器・耳環・管玉・曲玉・ガラス製小玉・鉄鏝・馬具などが検出された。また、玄室内及び周辺部より中世・



遺跡遠景

近世の陶磁器が出土した。

丘陵上部の試掘調査については、地形の特徴からなんらかの遺構が存在すると思われたが遺構・遺物の発見はなかった。

発掘調査は、昭和60年6月17日から7月31日の約1ヶ月を要し終了した。

II 遺跡の位置と環境

屋宗横穴墓群は、大分市東部を北流して別府湾にそそぐ県下最大河川である大野川右岸の河口附近である大分市大字角子原屋宗に所在する。横穴墓群は志村から浜に広がる砂丘に突き出た標高15m前後の低丘陵の斜面部に形成されている。この付近の丘陵地は、更新世期の鶴崎層、大在層と称される地質系統に属する段丘堆積層からなっており、小礫・砂・シスト層の互層が主体となって、地表に近い部分は褐色ローム層となっている。横穴墓群は比較的安定したシルト層を狙って標高12～13m程の西側斜面部に並んで掘り込まれている。

さて、屋宗横穴墓群の所在する大分市東部の海岸部は「豊後風土記」や「和名抄」によれば佐魁郷にあたり、「海部」として栄えた海部郡の一部であるとされている。この地域は弥生から古墳時代にかけて、豊後の中でも北部九州、瀬戸内、畿内地方の文化や文物などの直接・間接



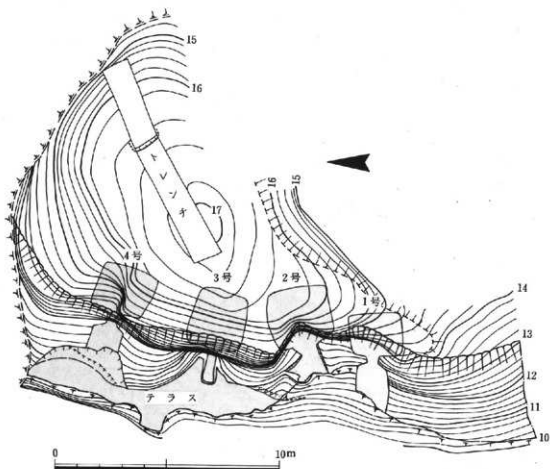
作業風景



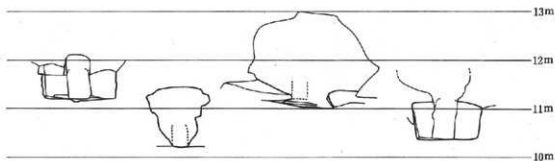
第1図 屋宗橋穴墓群周辺主要古墳分布図

的な影響がきわめて強く現れた地域とすることができ、可耕地である大きな沖積平野が形成されてない環境下にあつて海に活路を見出した人々の里としてきわめて特徴的な地域とすることができよう。

弥生時代にあつては、浜・細遺跡など青銅器の集中地域として、古墳時代の5世紀頃になる



第2図 横穴墓配置図



第3図 横穴墓垂直分布図

と、丹生川河口西岸の里および城原の丘陵には県下最大規模をもつ亀塚古墳や大蔵古墳などの前方後円墳が築かれ、亀塚古墳の被葬者はこの時期海部全体に勢力をのびたことも考えられる。しかし、6世紀以降になると衰退して行くようで、今回新たに発見された屋宗横穴墓群の他に城原横穴墓群・岡下横穴墓群が確認されているのみでこの時期における首長墳の姿を見ることはできない。

III 遺構と遺物

横穴墓は、合計4基が検出された。南から北へ向って1～4号の番号を附した。2・3号横穴墓は、すでに開口した状態で発見され、ゴミ穴として利用されていた。また、古老の話によると、この2基は戦時中に防空壕として使用したとのことであり、敷石はすでになく、2号と3号の間は階段状の通路が設けられ玄室内でつながっている。

このことから、遺物の出土は期待されなかったが、2号内の土砂中より、多量の中へ近世の陶磁器や瓦器碗片・土師器坏とともに、若干数の須恵器片が出土した。なお、玄室床面上には土師器大鉢がふせられた状態で出土し、中から頭蓋骨片が確認された。防空壕として使用した戦時中の作業であろうか。3号横穴墓からは、土砂水洗の結果鉄鏝などの鉄器が数点検出された。

今回新たに発見された2基は、比較的良好な原状をとどめており、前庭部における墓前祭祀の状況が確認された。しかし、1号横穴墓はすでに天井部の大半が崩れ落ち、土砂が羨道から玄室内まで充満していた。そのため、玄室内の遺物については、発掘時では敷石の間にはさまった状態で大甕の破片を検出したにすぎなかったが、土砂の水洗の結果、耳環・小玉・刀子・鉄鏝などを検出することができた。4号横穴墓では、玄室内土砂中より、常滑大甕（15世紀）の口縁部破片や胎土目の初期伊万里皿（16世紀末）が出土した。これを中世期における再利用とするには人骨の出土はなく、また伊万里皿をのぞけば小破片の遺物ばかりであり情報不足と言う他ない。

いずれにしても、この時期に横穴墓の蓋は開かれたものと考えられ、横穴墓本来の副葬品である鉄鏝が、床面よりかなり浮いた状態で閉塞施設があるすぐ奥側の羨道部で発見された。このことから玄室内部は攪乱を受けたものと理解され、水洗によって耳環・曲玉・小玉・鉄鏝・刀子・馬具・鏝などが検出されたが、鉄器類は折れたり、一部欠損しているものばかりであった。

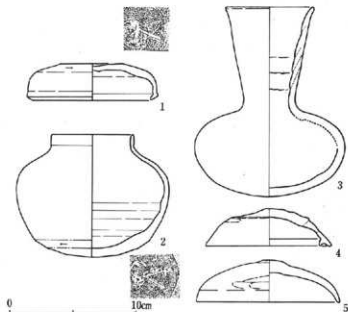
また横穴墓の他に斜面部を平たく加工してテラス状遺構が検出された。この平坦部は最も北側に位置する4号横穴墓の前で湾曲して終り、1・2号横穴墓のある南へのびる状況がうかがえたが、すでに崩壊していた。横穴墓がさらに南へ展開しないことから、このテラス状遺構は、4基に共有する墓道（幹道）的性格が想定された。

1号横穴墓

横穴墓群の南端に位置する。前庭部は底面幅1.3m～1.5mを測るが、全長は先端部が崩壊し不明である。現存長2m程である。羨門前面には幅約0.16m、長さ約0.8m、深さ0.05mの長方形の堀り込みがあり、板石ないし木蓋で閉塞されていたものと考えられる。また人頭大の河原石が散乱した状態で検出された。板石ないし木蓋を固定したものと考えられる。羨道部は長さ0.6m、幅0.4mを測り、玄室内に向ってやや広がる。玄室は長さ1.9m、幅2.4mの横長の隅丸長方形を呈する。天井部は奥壁を若干形成するドーム状をなすものと考えられる。床面は人頭大の河原石を全面に敷きつめている。また奥壁中央から南側には幅5cm深さ2～3cmの壁溝を付設している。

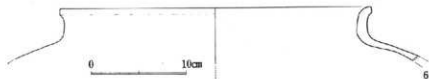
出土遺物は、前庭部と玄室内から出土した。前庭部出土遺物は、北側すなわち羨門をのぞみ左側に集中する。床面直上に土師器長頸甗1点（完形）、須恵器蓋付短頸壺1点（一部欠）が、約15cm程浮いて須恵器坏蓋2点（完形）が出土した。床直出土の土器は初葬、上面出土の土器を追葬の遺物として理解できる。

1は口径9.3cm、器高2.9cmを測り、ヘラ記号、胎土、焼成の特徴からみて2の短頸壺の蓋と



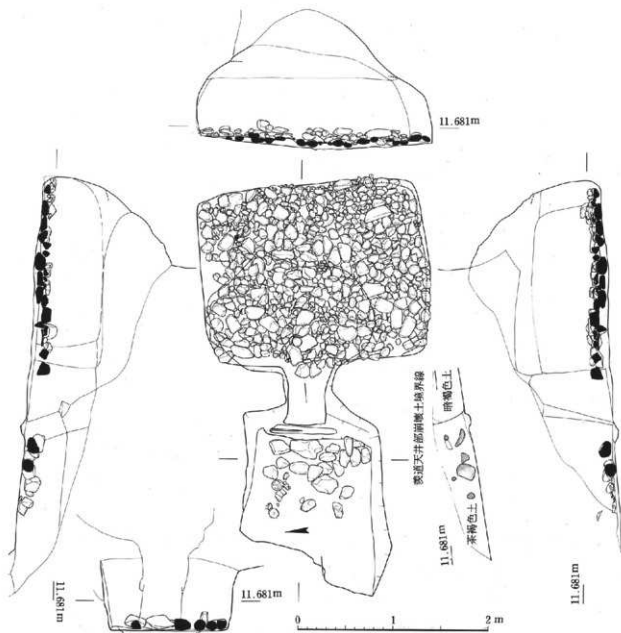
第4図 1号横穴墓前底部出土遺物実測図

考えられる。形態は、天井部～体部が丸味をもち、口縁部にむかってほぼ垂直に降り、口縁端部は、内側に折りまげられている。調整は天井部外面が連続回転ヘラケズリ、体部～口縁部内外面はヨコナデ、天井部内面は一定方向のナデ仕上げである。天井部に「V」字のヘラ記号がある。2は1とセットをなす短頸壺で底部に「V」字のヘラ記号がある。復原口径



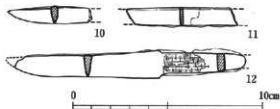
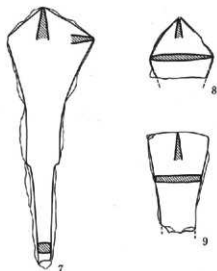
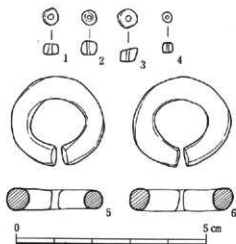
第5図 1号横穴墓玄室内出土遺物(1)

6.5cm、復原器高9.7cm、胴部最大径12.1cmである。形態は底部はやや平たく胴部へと続き、胴部は最大径を胴部上半の肩にもつ。口縁部は短く直口し、端部は丸くおさめている。調整は、胴部下半～底部にかけて連続回転ヘラケズリ、他は内外面とも回転ヨコナデ仕上げである。3は土師器長頸甕で口径7.5cm、器高15cm、胴部最大径11.9cmである。口縁部は長く外方へのび口縁端部はやや外反する。胴部は扁平で胴部最大径はほぼ中位にある。内外面ともヘラミガきを



第6図 1号横穴墓実測図 (1/40)

施すが頸部には部分的にハケメ痕が残る。4は坏蓋で口縁9.9cm、器高2.9cmを測る。形態はやや扁平な頂部から斜め方向に直線的にのびる体部で、口縁端部付近に比較的長いかえりを有するが口縁端部をむすぶ線から下方へ張り出ない。調整は天井部外面がヘラ切りで体部～口縁部



第7図 1号横穴墓玄室内出土遺物(2)

にかけては内外面回転ヨコナデ、頂部内面は不定方向ナデ。5は口径11.3cm器高3.3cmを測る坏蓋である。形態は丸味を帯びた体部にほぼ直角におりる口縁部を有し、天井部に低い円盤状のはりつけを施している。調整は口縁端部が内外面回転ヨコナデ、他は器面が荒れて判別しにくい内面にヘラみがきが若干認められる。色調は暗青灰色を呈し、還元焰焼成がなされているが調整技法の特徴は土師器製作の技法と考えられる。

玄室内出土遺物は、須恵器大甍片、耳環、深緑色をした硬玉・土玉・ガラス製小玉・鉄鏃・刀子が出土した。6は大甍口縁部である。口縁部は一度立ち端部がやや反するものである。焼成不良のためか淡灰白色を呈し軟質である。内外とも風化はげしく調整は不明であるが胴部の破片をみると外面は平行タタキ、内面は青海波タタキである。小玉は4点出土。1・2は黒色の土製、3・4はガラス製でいずれもスカイブルーである。耳環は2点出土、銅胎に金箔を施すものと思われるが金箔ははがれ落ちている。5は長径2.4cm短径2.3cm重さ8g、6は長径2.6cm短径2.4cm重さ9.5gである。

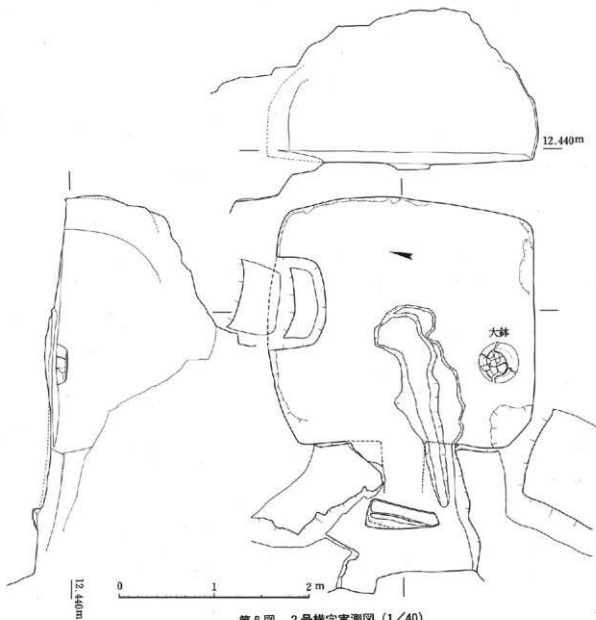
第1表 1号横穴墓出土玉類計測表

No	種別	径(mm)	長さ(mm)	色調
1	土玉	4.4	2.7	黒色
2	土玉	4.0	3.7	黒色
3	ガラス玉	5.1	3.5	スカイブルー
4	ガラス玉	2.2	2.9	スカイブルー

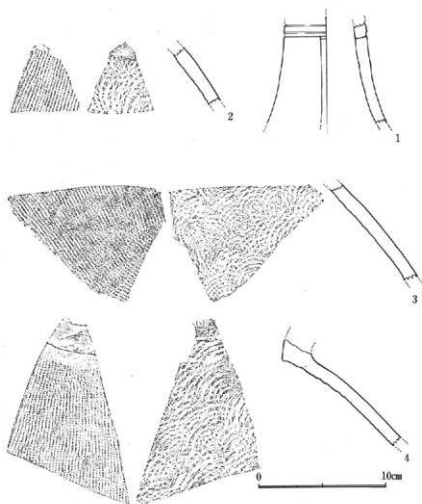
鉄鏃は3点出土。7・8は阿丸造主頭広根斧箭式、9は方頭広根斧箭式のものと思われる。刀子は3点出土。10・11は刃部片であるが12は柄部木質が残りはば完形のものである。現存長12.3cm、現存刃部長7.8cm、刃幅は中央付近で1.2cmである。なお、硬玉製管玉は小破片のため実測不可能であった。

2号横穴墓

1号横穴墓の北側約3mに位置する。羨門は他の3墓とやや異なり南西に開口する。横穴墓は戦時中に防空壕として使用され、天井部・羨道・羨門・前底部などが改変されている。羨門部には長さ0.2m、幅0.7m、深さ0.1mの長方形の掘り込みが検出された。板石・木蓋などの閉塞施設の一部と考えられる。羨道は玄門部と閉塞掘り込みから推定すると長さ0.6m、幅0.4m



第8図 2号横穴実測図 (1/40)



第9図 2号横穴墓玄室内出土遺物実測図

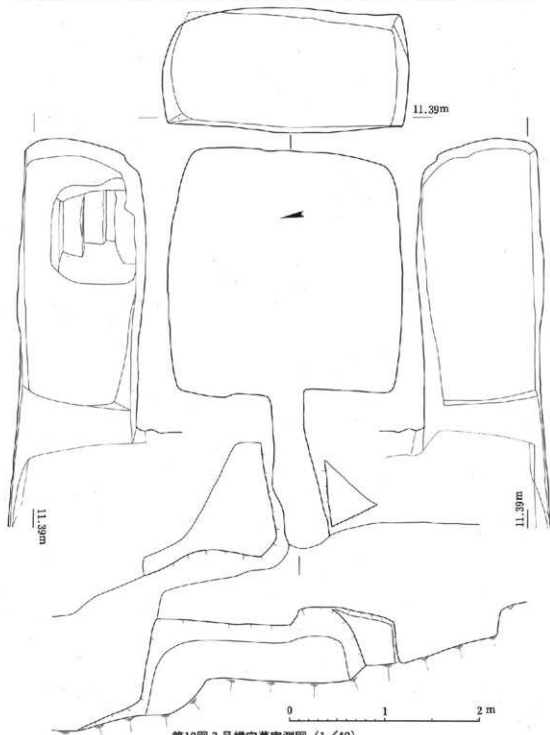
程となる。玄室内は平面形長さ2.6m、幅2.8mの略正方形を呈しており、断面形は奥壁を形成しないドーム形を呈するものと考えられる。床面にはすでに敷石はなく、新たな溝なども造られているが、壁側の一部に壁溝がある。

出土遺物は、玄室内土砂内及び床面から、多量の近世～現在の陶磁器類とともに、中世の糸切土師器環・瓦器碗片等がみられた。横穴墓に伴うものとしては須恵器環蓋小片・壺片・高坏片が出土した。

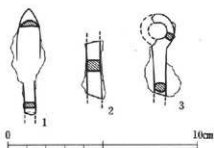
1は須恵器高坏の脚部片である。長脚二段透しのもので、中央に2条の沈線が認められ、焼成は良好である。内外面と青灰色を呈す堅緻な仕上げである。2～4は須恵器甕胴部片である。すべて外面平行タタキ、内面同心円タタキ文であり、特に3は同心円文が乱れていない。堅緻な仕上げで青灰色を呈す。

3号横穴墓

2号横穴墓の約5m北側に位置する。横穴群中最も下位にあり、テラス遺構とほぼ同じレベルである。羨道・羨門・前庭部はすでに大きく改変されており原状をとどめてない。羨門は現状で幅0.4m、高さ1.25mである。玄室平面形は長さ2.56m、幅2.5mの隅丸方形である。断面



第10図 3号横穴墓実測図 (1/40)



第11図 3号横穴玄室内出土遺物

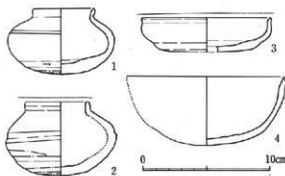
形は天井部がよく残っており、奥壁から羨門部にいたるまで直線的にのびる。玄室中央の横断面形は幅2.4m、高さ1.3mのはこ形を呈している。玄室床面は敷石すでになく、壁溝はないが羨門方向にむかって下降している。

出土遺物は鉄鍬2点と馬具に使用する兵庫鎖の一部と思われる鉄製品が1点出土した。鉄鍬は錆のため型式がよくわからないが片丸造鑿簡式と思われる。

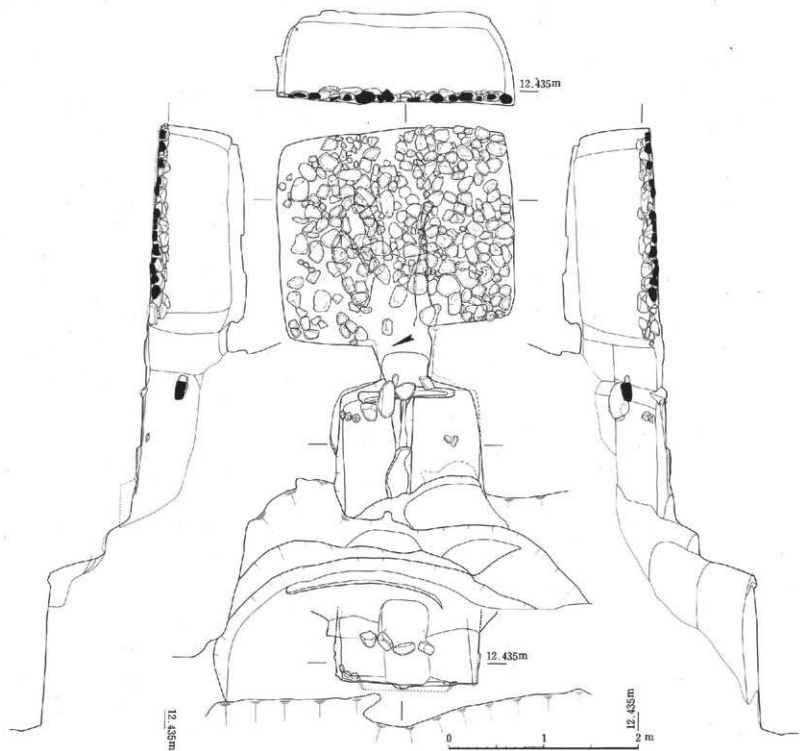
4号横穴墓

横穴墓は3号横穴墓の約5mの北側にあり横穴墓群の北端に位置する。羨門は北西に開口しており、テラス遺構より約1m程高い。前庭部は床面で長さ約1.5m、幅約1.45mである。中央に幅0.2m、深さ0.1mの浅い排水溝を通して。羨門全面には幅約0.11m長さ約1m深さ0.05mの掘り込みがあり、板石ないし木蓋で閉塞したものと考えられる。羨門は幅0.45mを測るが高さは一部崩れ落ちている。現在高0.9mである。羨道は長さ0.4mとやや短く、幅は羨門部で0.45m、玄門部で0.65mと玄室にむかって広がる。玄室平面形は長さ2.2m幅2.4mの略正方形を呈している。断面形は天井部がほぼ残り、縦断面形が奥壁を形成し、羨門付近まで直線的にのび、羨道部で一段低くなり羨門部へと続く。横断面形は玄室中央で幅2.5m、高さ0.8mのやや扁平なアーチ形をなすがはこ形に近い様相を示す。床面は人頭大の河原石を敷きつめており、羨道にむかって低くなっている。

出土遺物は、前庭部と玄室内から出土した。前庭部出土遺物は、須恵器短頸壺2点（完形）、土師器碗1点（一部欠）が地山直上に正置されて出土し供献儀礼の痕跡が認められた。また前庭部を埋めていた土砂の上部から須恵器杯の口縁部片が1点出土した。1・2は短頸壺でほぼ同一の形態を示す。1は口径4.8cm、器高5.2cm胴部最大径8.5cmである。形態は口縁部は外反気味に直立し、端部をやや肥厚させる。胴部はなで肩をなし最大径が中位よりやや上方にある。肩部に一条の沈線をめぐらす。底部は丸底である。調整は底部外面は連続回転ヘラケズリを施し、内面は同心円タタキ後にナデ消している。他は内外面とも回転ヨコナデ仕上げである。2は口径5cm器高5.9cm胴部最大径8.6cmである。形態・調整は1と同一である。3は坏で復原口径10.2cm、器高2.7cmである。底部は平たく体部との境は段をもつ。体部から口縁部は丸く内湾しながら外方へのび口縁端部を小さく外反させる。調整は底部外面はヘラ切り未調整、他は内外面とも回転ヨコナデ仕上げである。4は土師器碗で復原口径12.6cm、器高5.5cmを測る。形態は底部



第12図 4号横穴墓前庭部出土遺物実測図

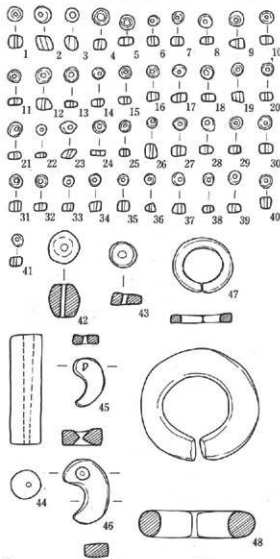


第13図 4号横穴墓実測図 (1/40)

第2表 4号横穴墓出土玉類計測表

(No.42・43は土玉)

No	径(mm)	長さ(mm)	色 調	No	径(mm)	長さ(mm)	色 調	No	径(mm)	長さ(mm)	色 調
1	4.0	3.4	スカイブルー	16	3.0	2.4	スカイブルー	31	3.1	3.0	スカイブルー
2	4.6	4.0	スカイブルー	17	3.9	2.5	ライトブルー	32	3.3	2.0	ライトグリーン
3	3.8	3.9	スカイブルー	18	3.5	2.1	スカイブルー	33	2.9	2.2	コバルトブルー
4	4.0	2.9	スカイブルー	19	3.1	2.9	スカイブルー	34	3.0	2.6	スカイブルー
5	3.9	2.1	スカイブルー	20	3.0	2.1	スカイブルー	35	3.0	2.9	グリーン
6	2.6	2.5	スカイブルー	21	3.8	2.0	ライトブルー	36	2.7	2.1	ライトグリーン
7	3.6	2.1	コバルトブルー	22	2.9	1.2	スカイブルー	37	3.4	2.6	コバルトブルー
8	3.3	2.0	ライトブルー	23	4.5	2.1	ライトグリーン	38	3.0	2.0	スカイブルー
9	4.0	2.8	グリーン	24	3.5	1.9	コバルトブルー	39	3.4	2.1	スカイブルー
10	3.9	2.1	スカイブルー	25	2.7	2.0	スカイブルー	40	3.0	2.9	コバルトブルー
11	4.0	2.0	スカイブルー	26	2.5	4.0	スカイブルー	41	3.4	3.0	ライトブルー
12	4.0	3.0	スカイブルー	27	3.9	2.5	スカイブルー				
13	3.6	1.9	スカイブルー	28	3.6	2.1	グリーン	42	7.0	3.0	ブラック
14	3.4	2.0	コバルトブルー	29	3.8	2.2	コバルトブルー	43	8.5	8.6	ブラック
15	3.0	2.0	スカイブルー	30	3.5	2.5	ライトグリーン				

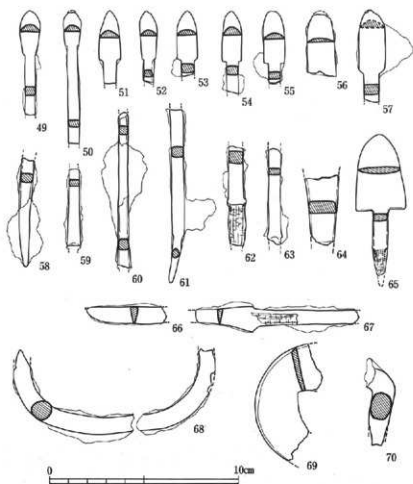


第14図 4号横穴墓玄室内出土遺物(1)

は丸く、体部から口縁部は丸く内湾しながら外方へのび口縁部でやや外反する。口縁部は丸くおさめる。調整は器面が滑めつしているため不明瞭であるが全体にナデが施されている。

玄室内出土遺物は水洗をふくめて、耳環、菅玉、曲玉、土玉、ガラス小玉、鉄珠、刀子、馬具、鐙などが出土した。

1～41はガラス製小玉である。大きさは第1表のとおりであるが径をみると最大4.6mm、最小2.5mmで平均3.4mmを測る。長さは最大4.0mm、最小1.9mm、平均2.5mmである。色調はスカイブルーが最も多く他にライトブルー・コバルトブルー・グリーンなどがある。41点の出土である。42・43は黒色を呈する土玉である。ガラス製小玉に比べ大きい。44は深緑色をした硬玉製の菅玉で幅1.6cm、長さ5.8cmある。孔は一方から行っており、孔径は5.5mmと2.5mmである。1点の出土。曲玉は2点出土した。2点とも白灰色を示す滑石系の軟玉である。45は幅は頭部で7.5mm、長さ8mm、重さ0.5gである。46は幅1.15mm、長さ1.7mm、重さ2gである。47・48は耳環である。47は長径1.6cm、



第15図 4号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)

短径1.3cm、重さ2gを測り小形のものである。胴胎で金箔の有無は不明である。48は長径3.1cm、短径2.9cm、重さ2.3gを測り、今回出土した耳環の内最も大きい。銅胎に金箔を張ったものであるが大半ははかれ落ちている。

49～65は鉄鏃で17点が実測できたが他に鏃部・茎部が数点出土している。49～57は方丸造鑿箭式であり、鏃被部の大半は欠損している。58～63は鏃被～茎部で、62は棘部を有すものと思われる。64は方頭広根芹箭式に存すると思われる。65は広鋒両丸造三角形式のものである。以上鉄鏃は大きく三タイプのものが出土した。66・67は刀子、68・70は鐔の一部品と思われる。68は楕円形の鉄環に立開がつくタイプの鐔であろうか。69は太刀の柄と刀身の間にはきむ鉄板状の鐔と思われる。

テラス状遺構

テラス状遺構は3～4号横穴墓にかけて検出された。1・2号横穴墓にかけては緩傾斜の崖となっており、すでに崩壊していたが、横穴墓の配置からみて、4基の横穴墓に伴う遺構と思われる。テラス部は第4号横穴墓の前面北側で湾曲して終り、4号横穴墓前庭部下段の壁ぎわに

幅13cm深さ約4cmの溝が設けられている。テラス部の現在長は約11m、幅は3号横穴墓の前では約2m、4号横穴墓で約1.2mを測る。

テラス部が1号横穴墓までのびると想定して、テラス部より同レベルで横穴内部に入れる横穴墓は1・3号横穴墓であり、2・4号横穴墓はテラス部床面より約80～90cm高くなっている。とすればなにか階段のような施設が必要と考えられるが前庭部先端部のいたみがはげしく明確な施設については不明であった。



遺 跡 近 景

IV まとめ

調査成果について簡単に整理すると次のようになる。

屋宗横穴墓群は、丘陵の西側斜面にテラスが造られ、4基の横穴墓がその遺構によってつながるといった特徴がまず第一に上げられる。しかも、横穴墓はよく数十基ないし、それ以上の群集墓を形成するわけだが、ここでは大きな横穴墓群を形成することなく群集墓中の最小の単位グループ程度の横穴墓が独立して営まれている。

それではこのようなまとまりを示す4基の横穴墓について、出土遺物及び玄室の形態変化に着目して横穴墓の築造年代とその変遷についてみていくことにする。

4基の横穴墓のうち最も古いと思われる横穴墓は、長脚二段透しの高坏脚部を出土した2号横穴墓である。明確な奥壁をもたず断面がドーム状を呈するもので6世紀後半頃の築造と思われる。次に1号横穴墓が成立する。前庭部床面直上より須恵器蓋付短頸壺と土師器長頸瓶が出土しており、6世紀末葉～7世紀前半頃に比定されるものと思われる。1号横穴墓は奥壁を形成するがあまり明瞭ではなく断面形はドーム状をやや残す形態となっている。また、1号横穴墓は、前庭部において床面直上の初葬時と思われる遺物群より約15cm程上位で須恵器坏蓋が出土している。このことから、1号横穴墓は追葬されたものと考えられる。その時期は坏蓋の特徴から7世紀中葉頃である。

さらに、横穴墓の北端上面に4号横穴墓が築造され、前庭部の床直直上において正置された状態で須恵器短頸壺、土師器碗、また埋土中から須恵器坏が出土している。これらの内、須恵器の特徴は7世紀中葉に比定されるものであり、横穴墓は奥壁を明確にもち、断面形もはこ形に近い形態になっている。最後に、横穴墓群の最下段部に3号横穴墓が築造されるものと考えられる。横穴墓は他の3基に比べ、奥壁を明確にもち、断面形は玄室から羨門までほぼ一直線に続き横断面形も完全なはこ形を呈している。この横穴墓からは明確な時期を決定するような遺物の出土はないが、その形態が福岡県願光寺裏山古墳⁷¹、佐賀県金立開拓ST012古墳⁷²、奈良県文珠院西古墳⁷³などの7世紀後半代の石室墳に類似するものと考えられ、4号横穴墓もほぼこの時期に比定されるものと思われる。

以上、須恵器の所属年代を手がかりに、玄室形態の変化、すなわち奥壁の形成、断面形がドーム形からはこ形へと変遷していく過程を想定してみた。

このように、屋宗横穴墓群は6世紀後半頃に開始され7世紀後半頃まで営われる。そして、墓地群のあり方からみて、4基の横穴墓は累代墓としての性格がきわめて強いものと考えられる。それは、1号と4号横穴墓にみられるように追葬時と初葬時がオーバーラップするような状態で新たな墓が築造されていくものと思われる。これら是有力家父長家族（小豪族層）の累代的墳墓と規定でき、家父長の継続性を示すものと考えられる。

第3表 屋宗横穴墓一覧表

		式	室				羨道		羨門		前庭部		遺物	備考
No	平面形	断面形	長 m	幅 m	高 m	礎床	長 m	幅 m	幅 m	高 m	長 m	幅 m		
1	横長 隅丸長方形	F - A	1.9	2.4	—	河原石 (全面)	0.6	0.4	0.4	—	現存長 2	1.3 1.5	須恵器蓋付埴蓋 須恵器埴蓋 須恵器甕片 土師器長頸埴 管玉・片・ガラス小玉(2) 土玉(2)・耳環(2) 鉄鏃(3)・刀子(3)	前庭部 供献儀礼 壁溝
2	略正方形	F - A	2.6	2.8	—	—	推定 0.6	推定 0.4	—	—	—	—	須恵器高杯脚部片 須恵器甕脚部片 中世土師器環・瓦器片 近世～現在陶磁器	壁溝 防空溝 3号と階 段で通じる
3	隅丸方形	はこ形	2.56	2.5	1.3	—	約 0.5	0.34	0.4	1.25	—	—	鉄鏃(2)・兵庫鎧	防空溝 2号 と階段通じる
4	略正方形	扁平アーチ (はこ形に近い)	2.2	2.4	0.8	河原石 (全面)	0.4	0.45 (0.65	0.45	現在高 0.9	現存長 1.5	約 1.45	須恵器短頸甕 土師器甕 常滑口縁片(中世) 伊万里皿(近世) 管玉(1)・ガラス小玉(1) 土玉(2)・曲玉(2) 耳環(2)・鉄鏃(17+α) 櫛縁片(1)・銅片(1)・刀子(2)	前庭部 供献儀礼

註1 定村實二「箕田中原古墳調査報告」『美夜古文化19号』1969

註2 『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会 1985

註3 『図録飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館 1979

須恵器の暦年代については、高橋敏・小林昭彦の両氏(県文化課)より御教示いただいた。しかし、編者の力不足により十分な検討を行うことができなかったことをお詫し下さい。編者の今後の課題としたい。

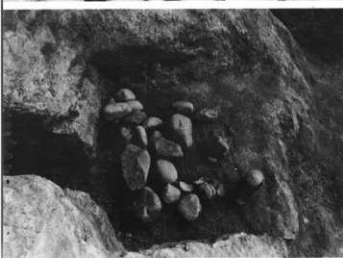
写 真 图 版

図版 1

第1号横穴墓 玄室内	第1号横穴墓 喪門・前庭部1)
第1号横穴墓 前庭部土層	第1号横穴墓 喪門・前庭部2)
第1号横穴墓 前庭部（北より）	第1号横穴墓 前庭部（南より）
第1号横穴墓 前庭部遺物出土状況1)	第1号横穴墓 前庭部遺物出土状況2)

図版 2

第3号横穴墓 玄室内	第2号横穴墓 全景
第4号横穴墓 前庭部・テラス	第2号横穴墓 玄室内
第4号横穴墓 喪門・前庭部	第4号横穴墓 前庭部遺物出土状況
玄室内	第4号横穴墓



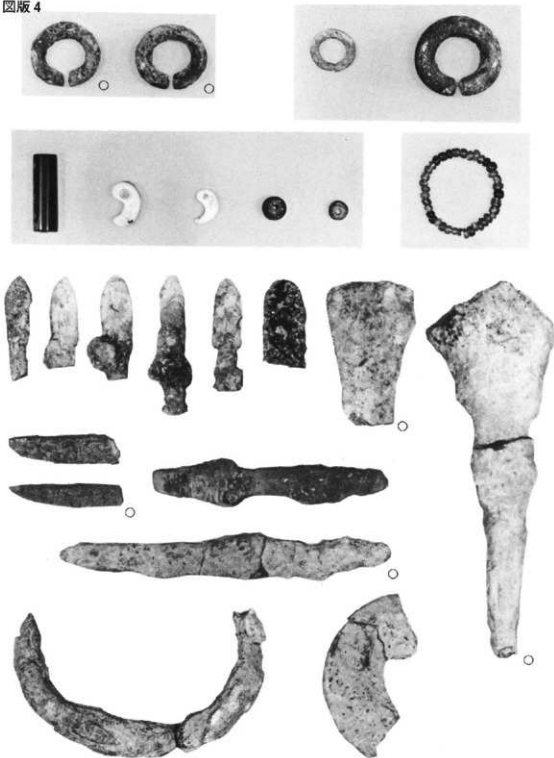
图版 2





横穴墓前庭部出土遺物 (○印は4号、他は1号出土)

図版 4



横穴墓玄室内出土遺物 (○印は1号、他は4号出土)

屋 宗 横 穴 墓
大分県大分市所在遺跡発掘調査報告書
大分県文化財調査報告
第 74 輯

1986 年 3 月 31 日

発行 大分県教育委員会
印刷 佐伯印刷株式会社

